

謎に満ちたヤマト王権

2022年7月20日

我部山 民樹

1. はじめに

女王・卑弥呼（ひみこ）が3世紀中頃にこの世を去った後、3世紀後半から約400年の間、土を高く盛り上げた墳丘をもつお墓（墳墓）が盛んに造られた。このお墓を「古墳」といい、古墳は当時の階層の高い人によって築造された。王や豪族が、死んだ後も自分の力を誇示するために墓としてつくらせたものとされている。考古学上の時代区分（*1）の古墳時代の始まりである。

*1. 時代区分

時代区分	年代	概要
弥生時代 （やよいじだい）	紀元前10世紀～3世紀中頃	日本列島における時代区分の一つであり、紀元前10世紀または紀元前5世紀、紀元前4世紀頃から、紀元後3世紀中頃までにあたる時代の名称。採集経済（共同労働によって、狩猟、漁撈などを営み、植物性食物も自然性のものを採取して、生活を維持する経済）の縄文時代の後、水稻農耕を主とした生産経済の時代である。
古墳時代 （こふんじだい）	3世紀中頃～7世紀頃	日本の歴史において弥生時代に続く考古学上の時期区分であり、古墳（特に前方後円墳）が盛んに築造された時代を指す。
飛鳥時代 （あすかじだい）	593～710年	日本の歴史の時代区分の一つ。広義には、難波宮（現大阪市）や飛鳥（現奈良県明日香村）に宮都（「宮室、都城」を略した言葉で、宮室は天皇の住まいを意味し、都城はそれを中心とした一定の空間のひろがりを示す）が置かれていた崇峻天皇5年（592年（ただし旧暦12月8日なので、西暦に換算すると593年））から和銅3年（710年）にかけての118年間を指す。

巨大古墳の分布は奈良県や大阪府南部を中心とした近畿地方に集中している。このことから古墳をつくった各地の王、豪族らが、ヤマト（*2）地方の王を中心に政治的に結びついた連合体を形成していたと考えられている。これを「ヤマト王権」といい、このような政治体制は300年ほど続いたとされる。

*2. ヤマト

ヤマトとは現在の奈良地域を示す地域名称として用いられている。
「大和」という国名は、7世紀の『古事記』『日本書紀』では使用されておらず、8世紀中ごろに施行された『養老令』から、広く「大和」国と使用されるようになった。さらに、「倭」は、中国で日本の総称として用いられていた。そのため、地域名称としての「ヤマト」を表す場合、国名の「倭」や「大和」との混同を避けるために、カタカナでその音を表している。

古代日本を知る手がかりになる史料は基本的に朝鮮や中国の歴史文献しかない。しかし、中国や朝鮮の歴史文献に於いて倭国に関する記録は「魏志倭人伝」の266年の記録から「『晋書』安帝紀、『太平御覧』」の413年の記録の間、記録は全くない。この時期は「空白の4世紀」と呼ばれていて、王権の成立過程は不明である。史料がないのは、大陸が内戦によって不安定だったからだとされている。

空白の4世紀の時期は謎のままであるが、この時期のみならずヤマト王権に関しては謎が多い。

- ・ 邪馬台国の女王・卑弥呼とヤマト王権の関係は？
- ・ 前方後円墳何故築造され、やがて何故終焉を迎えたのか？
- ・ 好太王碑に記述された倭王は？
- ・ 倭の五王（讃、珍、済、興、武）とは？
- ・ 倭の五王の朝貢の目的は？
- ・ 稻荷山古墳出土鉄剣の銘の獲加多支鹵大王（わかたけるだいおう）は五王の「武」か？そして「武」は第21代雄略天皇か？
- ・ 第26代継体天皇とは？
- ・ 九州勢力の「磐井の乱」とは？王権間の争いか？

2. この時代の主な出来事

弥生時代、古墳時代、飛鳥時代

年代	主な出来事	歴代天皇(日本書紀)
57年	紀元57年に倭の奴国の王の使者が後漢の都である洛陽にやってくる光武帝から印綬を受けた。(後漢書東夷伝) 「漢委奴国王」の金印とされている。	第11代・垂仁天皇 在位；前29～後70年

107 年	倭国王帥升（すいしょう）たちが奴隷 160 人を安帝（あんてい）に献上した。（後漢書東夷伝）	第 12 代・景行天皇 在位；71～130 年
146 ～ 189 年	倭国大乱が起こる。 146～189 年、倭国は大いに乱れ、さらに互いに攻め合い、何年も主がいなかった。卑弥呼という名の一人の女子が有り、年長だが嫁いでいなかった。鬼神道を用いてよく衆を妖しく惑わした。ここに於いて共に王に立てた。（後漢書東夷伝） 魏志倭人伝では時期は 80～190 年頃とされている。	第 13 代・成務天皇 在位；131～190 年
239 年	女王・卑弥呼が三国時代の魏に使者を送り、魏より「親魏倭王」の封号と金印紫綬を与えられる。（魏志倭人伝）	神功皇后（第 14 代・仲哀天皇の皇后、摂政） 在位；201～269 年
243 年	卑弥呼が魏に使者を送る	同上
247 年	卑弥呼が魏に使者を送る	同上
249 年	これ以前に卑弥呼死す。死因不明。	同上
266 年	倭人が朝貢したと記されている。 倭人とは卑弥呼の宋女（正統の血縁のある娘）で後継・台与（とよ）のこととされる。卑弥呼の後継の男王（名は不明、弟との説もある）の次に、13 歳で女王になり倭をまとめたとされる。（晋書）	同上
270 ～ 310 年		第 15 代・応神天皇 在位；270～310 年
369 年	・倭国が朝鮮半島南部に任那を建国、倭国の北限とする。（日本書紀）	第 16 代・仁徳天皇 在位；313～399 年

	<p>・天理市の石神神宮（いそのかみじんぐう）に所蔵されている七支刀（しちしとう）は、その銘文によると 369 年に作られたとある。</p>	
391 年	<p>倭（ヤマト王権）が朝鮮に出兵。（414 年に建立した高句麗の好太王碑による）倭が百済を破った。新羅を臣民にした。それまでは、百済と新羅は高句麗に朝貢していた。（好太王碑）</p> <p>出兵の理由は朝鮮半島南部の伽耶の国の鉄鋌（てつてい）とよぶ短冊形の板に規格化された鉄素材を確保するためと推測されている。</p>	同上
400 年	<p>倭が新羅に侵攻したが、高句麗が倭を撃退した。（好太王碑、または広開土王碑）</p>	第 17 代・履中天皇 在位；400～405 年
404 年	<p>倭が高句麗に攻めてきたが、撃退した。（好太王碑）</p>	同上
413 年	<p>高句麗・倭国及び西南夷の銅頭大師が安帝に貢物を献ずる。（『晋書』安帝紀、『太平御覧』）</p>	第 19 代・允恭天皇 在位；412～453 年
414 年	<p>高句麗の王・好太王が碑を建立（好太王碑）</p>	同上
421 年～	<p>「倭讚」（姓は倭で名は讚と名づけたようだ）が宋に 3 度遣使を送る（宋書、倭人伝）</p>	同上
425 年	<p>「讚」、司馬の曹達を遣わし、宋の文帝に貢物を献ずる。（宋書、夷蛮伝）</p>	同上
430 年	<p>「？」、宋に使いを遣わし、貢物を献ずる。（宋書、文帝紀）</p>	同上
438 年	<p>「珍」（讚の弟）が宋に遣使を送る。（宋書倭人伝）</p>	同上
443 年～	<p>「済」が宋に 3 度遣使を送る（宋書倭人伝）</p> <p>（「珍」との血縁関係は書かれていないので、血縁関係が無いと解釈できる）</p>	同上
		第 20 代・安康天皇

		在位；453～ 456年
462年	「興」（濟の子）が宋に遣使を送る（宋書倭人伝）	第21代・雄略天皇 在位；456～ 479年
471年	稲荷山古墳の鉄剣の銘文に、この年につくられたとある。そして銘文中の「獲加多支鹵大王（わかたけるだいおう）」は第21代・雄略天皇か？そして五王の「武」か？	同上
478年	「武」（興の弟）が宋に遣使を送る（宋書倭人伝）	同上
480～ 484年		第22代・清寧天皇 在位；480～ 484年
485～ 487年		第23代・顕宗天皇 485～487年
488～ 498年		第24代・仁賢天皇 488～498年
500年	<p>・武烈天皇が即位。しきりに多くの悪行をなさって、一つも善業を行われなかった。さまざまな酷刑をご覧にならないことはなく、国内の人民は、みな震え怖れていた。（日本書紀）</p> <p>・3月、倭軍が新羅の長嶺鎮（ちょうれいちん）を攻めて陥落させた。その結果、新羅の第21代の王・炤知麻立干（しょうちまつりかん）が薨去している。（朝鮮の史書『三国史記』）</p>	第25代・武烈天皇 498～506年
502年	「鎮東大將軍 倭王」の武が「征東將軍」を進号されたと記載されている（正しくは「征東大將軍」か）。（中国の史書『梁書』武帝紀）	同上
507年	・武烈天皇、嗣子なく崩御し、仁徳天皇からの男系の皇統は途絶えるものの、姉である手白香皇女と	第26代・継体天皇

	<p>橘仲皇女が何も傍系たる天皇（継体・宣化）の皇后となる。（古事記）</p> <p>（女系の嗣子を産み、また何もその嗣子の皇統が今日の皇室へと続いている。）</p> <p>・越の国（福井県）より、第 26 代継体天皇を迎える。第 15 代応神天皇の 5 世孫とされている。（当時は 4 世孫までが姻戚とされていた。）58 歳で即位したとされている。第 25 代武烈天皇に子女がいなかったためとされているが、仁徳天皇系に全く子孫がいなかったかについては疑問が残る。</p>	<p>在位；507～531 年</p>
527 ～ 528 年	<p>ヤマト王権が朝鮮半島南部に 6 万の兵を出兵する。「磐井の乱」（5 項に記載）発生</p> <p>朝鮮半島南部へ出兵しようとした近江毛野（おうみのけな）が率いる大和朝廷軍の進軍を筑紫君磐井（『日本書紀』は筑紫国造だったとする）がはばみ、翌 528 年（継体天皇 22 年）11 月、物部麁鹿火（もののべのあらかび/あらかい）によって鎮圧された反乱（日本書紀）</p>	<p>同上</p>
538 年	<p>仏教伝来</p> <p>（8 世紀はじめに書かれた「聖徳太子」（厩戸[うまやど]皇子）の伝記『上宮聖徳法王帝説』（じょうぐうしょうとくほうおうていせつ）が根拠）</p>	<p>第 27 代・安閑天皇 在位；531～535 年</p>
587 年	<p>「丁未（ていび）の乱」で蘇我馬子が物部氏を倒す。</p> <p>この結果、蘇我氏は親子二代に渡って対立してきた宿敵・物部氏の勢力を中央から完全に排除することに成功し、厩戸皇子と連携して更に権勢を強めていく。また、物部氏を中心としていた仏教反対派の発言力が衰え、仏教の国内浸透も本格化していくこととなる。（日本書紀）</p>	<p>第 31 代・用明天皇 在位；585～587 年</p>
592 年	<p>第 32 代崇峻天皇、蘇我馬子により暗殺される。（日本書紀）</p>	<p>第 32 代・崇峻天皇 在位；587～592 年</p>

592年	第30代敏達天皇の皇后が第33代推古天皇として即位する。初の女帝である。(日本書紀)	第33代・推古天皇 在位；592～628年
600年	第1回遣隋使を派遣 (日本書紀)	同上
604年	日本初の十七条の憲法を施行	同上

3. 古墳時代

日本列島では、古墳がさかんに造られた3世紀後半ごろから6世紀ごろまでを古墳時代と呼び、古墳とは土を高く盛り上げた墳丘をもつお墓(墳墓)をいう。

古墳は当時の階層の高い人によって造られた。王や豪族が、死んだ後も自分の力を示すために墓としてつくらせたものとされている。古墳の墳丘の周りの掘られた部分に水をためて濠(ほり)になっていることもある。墳丘の斜面には、石(葺石・ふきいし)が敷きつめられているものもあり、装飾や墳丘の崩れの防止などが目的だと考えられている。また、墳丘が2段・3段になっているものや、濠が2重・3重になっているものもある。

形も、上から見たときに、鍵穴の形をした「前方後円墳」、円形の「円墳」、四角形の「方墳」、「前方後方墳(ぜんぼうこうほうふん)」などバラエティーに富み、大きさも10m程度から400mを超える巨大なものまでさまざまである。



その数はなんと、全国で16万基もあるそうだ。2020年時点でのコンビニの数は全国で5万6千軒足らずであり、古墳はそれをはるかに上回っている。そのうち、前方後円墳が5,700基ほどとされている。

古墳時代は一般に前期(3世紀後半から4世紀まで)、中期(5世紀)、後期(6世紀)に分けている。

前期に近畿地方から瀬戸内海沿岸にかけて出現した前方後円墳は、しだいに西は九州南部、東は東北地方南部にまで広がっていく。形や副葬品が共通する古墳が各地に広まったことや古墳時代前期の巨大古墳の分布が奈良県や大阪府南部を中心とする近畿地方に集中していることは、小国を統一する王権が誕生したことを意味する。その中心はヤマトを中心とした近畿地方で、4世紀初めの倭国では、古墳を築造した各地の王が、ヤマト地方の王を盟主として政治的な連合体を形成するようになったと考えられる。これをヤマト王権と呼ぶ。

○前期（3世紀後半から4世紀）につくられた墳丘長さが200m以上の巨大前方後円墳は全て奈良や大阪に築造されている。

日本の古墳時代前期の巨大古墳（墳丘長さ200メートル以上）の一覧

古墳名	時期	墳丘長さ / 高さ (m)	所在地	治定陵墓 (*3)
箸墓古墳（はしはか） （前方後円墳）	3世紀 中・後	276/30	奈良県 桜井市	倭迹迹日百襲姫命（やまとととひももそひめのみこと） 第7代孝霊天皇の皇女
行燈山古墳（あんどんやま） （前方後円墳）	4世紀前	242/?	奈良県 天理市	第10代崇神天皇（すじん）
西殿塚（にしどのづか）古墳 （前方後円墳）	4世紀前	234/?	奈良県 天理市	手白香皇女（たしらかのひめみこ） 第26代継体天皇の皇后
メスリ山古墳 （前方後円墳）	4世紀前	230/?	奈良県 桜井市	
桜井茶臼山古墳 （前方後円墳）	4世紀初	208/?	奈良県 桜井市	
渋谷向山（しぶたにむかはやま）古墳 （前方後円墳）	4世紀後	302/25	奈良県 天理市	第12代・景行天皇
摩湯山（まゆやま）古墳 （前方後円墳）	4世紀後	200/?	大阪府 岸和田市	

島の山古墳 (前方後円墳)	4世紀末	200~/?	奈良県 磯城郡	
五社神(ごさし) 古墳 (前方後円墳)	4世紀後 期・5世 紀初	276/27	奈良県 奈良市	神功皇后(じんぐう) 第14代・仲哀天皇の皇后
佐紀石塚山古墳 (前方後円墳)	4世紀後 期・5世 紀初	220/?	奈良県 奈良市	第13代・成務天皇(せい む)
佐紀陵山(さき みささぎやま) 古墳 (前方後円墳)	4世紀後 期・5世 紀初	208/?	奈良県 奈良市	日葉酢媛(ひばすひめのみ こと) 垂仁天皇の皇后
蓬莱山(ほうら いさん)古墳 (前方後円墳)	5世紀初	226/?	奈良県 奈良市	第11代・垂仁天皇(すい にん)



五社神(ごさし)古墳



箸墓(はしはか)古墳

*3. 治定陵墓(じじょうりょうぼ)に対する専門家の問題提起例

・古墳の中には、現在の学術的到達点に立って被葬者が誰であるか明確な証拠がないにもかかわらず、古代皇室の埋葬地やその可能性があるといわれる地、すなわち陵墓あるいは陵墓参考地(以下、この質問主意書において陵墓等と略)という名の皇室用財産になっているものが数多くある。

・継体陵に限らず、明らかに被葬者を誤認していると思われる陵に対しても、治定(じじょう)替えの検討さえしない。旧慣墨守(従来やり方を踏襲し、しきたり通りにやっていくこと。守りの堅固なことを「墨守」という。)だ。誤って定めた現天皇陵には学術調査さえ許さず、本当の天皇陵には見向きもしないで、荒れるにまかせているのだから、これは古代の天皇に対する冒瀆と言える。

3世紀後半、突然に出現した巨大前方後円墳の箸墓古墳は列島各地の古墳の要素が入っているとされ、統合国家の大首長の墓で、後に大首長が地域の首長と手を結ぶとき、連合の証しとして大きさを離れた前方後円墳の形状を与えたと主張する考古学者や歴史家もいる。ヤマト王権の王は、大王と呼ばれるようになる。中でも5世紀の前方後円墳には、大仙陵古墳（だいせんりょうこふん）や誉田御廟山古墳（こんだごびょうやまこふん）のように、世界的に見ても巨大な墓が多く築造されるようになった。



大仙陵古墳(だいせんりょうこふん)



誉田御廟山古墳(こんだごびょうやまこふん)

前方後円墳の時代は、6世紀後半の見瀬丸山古墳という奈良県最大の前方後円墳で幕を閉じる。新しい政治的権威の象徴として、寺院の時代が始まったのだ。（丸山古墳の被葬者は天武天皇、持統天皇と治定されている。）古墳は7世紀の飛鳥時代まで造られるが、この時期の古墳は終末期古墳と呼んで区別している。

4. ヤマト王権

この時代、渡来人は、鉄製の武器や農具、工具を伝え、「須恵器（すえき）」とよばれる土器、金属細工など、新しい技術を伝えて、ヤマト王権の発展に寄与した。

須恵器とは朝鮮半島から伝わった青灰色をした硬い土器で、穴窯（あながま）と呼ばれる地下式・半地下式の登り窯を用いて1100度以上の高温で還元焰焼成されることで強く焼締まり、従来の土器以上の硬度を得られ、大量生産が可能となった。

碗



水瓶



(1) 箸墓古墳は卑弥呼の墓との見方が強まる？（3世紀中頃）

【近年、奈良盆地東南部に位置する纏向（まきむく）遺跡からは、3世紀前半では国内最大規模とされる大型建物跡（東西約12.4メートル、南北約19.2メートルで卑弥呼の居館か？）や、木製仮面、ベニバナ花粉などの重要な発見が相次いでいる。また、祭祀（さいし）に用いたとみられる2千個を超える桃の種も発掘されている。「鬼道（占いとされる）で衆を惑わしていた」とされる女王・卑弥呼の墓との説もある。箸墓（はしはか）古墳は最初に定型化された大型前方後円墳とみられているが、この遺跡内に位置する。この纏向遺跡に、中国の史書「魏志倭人伝（ぎしわじんでん）」に登場する邪馬台国の政治中枢が置かれ、それが発展して初期ヤマト王権が成立したとみる見方が、考古学者を中心に強まっている。】

桃の種
紀元135～230年



纏向遺跡、大型建物復元模型

卑弥呼の宮館か？



(2) 鉄器のヤマト王権への寄与（前2世紀～）

【鉄器は木工用の工具に始まり、農具や武器などの実用的な品物に使われた。弥生時代の最初は、ごく少量の輸入鉄器が使われていただけで、道具の主力は石器だった。ところが、鉄器の生産が進み、弥生時代後期には、石器はほとんど姿を消すが、弥生時代は石器時代から青銅器時代を経ることなく、鉄器時代へ移る過渡期だった。】

サヌカイトや黒曜石の薄い破片は、鉄の刃物より鋭い刃を作ることできるが、鉄器が耐久性に優れている。また、刃こぼれしても折れても石器は捨てるしかないが、鉄器は使えなくなっても鋳直して再生することができるので道具として石器より優れている。弥生時代後期に出現する鉄刃農耕具が農業経営規模の拡大と生産力の発展をもたらしたとされる。

また、武器としての機能も石器や青銅器より優れている。

3世紀の中国の歴史書「魏志東夷伝弁辰条(ぎしとういでんべんしんのじょう)」には、朝鮮半島南部の地域に鉄が多く出て、「韓、倭みな、したがってこれをとる。諸市買うにみな鉄をもちい、中国の錢をもちうるがごとし」と記されている。弥生人が鉄を求めてさかんに朝鮮半島南部に出かけていった様子が描かれている。ヤマト王権も朝貢をして独占的に鉄素材を手に入れ、地方豪族への支配権を強めていったとされる。

・紀元前の製鉄方法の伝来



鉄は、紀元前3世紀頃に青銅とほぼ同じ時期に朝鮮半島や中国沿岸から我が国に伝わってきたと考えられている。渡来人は、鉄製の武器や農具、工具を伝えて、さらに「須恵器」とよばれる土器、金属細工など、新しい技術を伝えている。

鉄の伝来ルートは図に示す様に、少なくとも3つあったという。第1は朝鮮半島から九州北部に伝わった弁辰鉄資本ルート、第2は朝鮮半島から山陰地方に伝わった大陸産鉄族ルート、第3は中国沿岸から九州熊本地方に伝わった海辺産鉄族ルートである。第1ルートが日向に向かったニニギ族、第2ルートが

出雲に向かったスサノオ族，第 3 ルートが球磨川に向かったアタ族の伝承になっていると考えられる。

砂鉄に頼るしかなかった倭は鉄鉱石より生産していた朝鮮半島より鉄素材を入手するようになる。

・前 2 世紀以降の鉄素材の入手

鉄素材はいわゆる戦略物資であり、弁辰地区は楽浪・帯方郡の管理下に置かれ、鉄素材を入手するためには郡の承認が必要であった。前 2 世紀以降、本格化する靫島・対馬・原の辻を介した倭人の鉄の入手は、こうした権利を認められているからこそ可能であったわけで、その権利を維持するための朝貢が頻繁に行われていたことは漢書など中国の文献に記されていることからわかる。3 世紀になっても朝鮮半島南部（金海・釜山）から、対馬・一支・伊都という海上交易路に変化がなかったことは、三韓・楽浪など出土土器の分布からみて、明らかである。

朝貢外交

朝貢履歴	時 期	目 的
倭国王帥升（すいしょう）たちが奴隷 160 人を後漢の第 6 代皇帝・安帝（あんてい）に献上	107 年	<ul style="list-style-type: none"> ・鉄素材を入手する権利を獲得・維持するためか ・朝貢貿易か？
女王・卑弥呼が魏に朝貢	239 年	<ul style="list-style-type: none"> ・中国皇帝の権威を利用して自国の支配体制を磐石にし、朝貢品に対する返礼品を貰うという名目で貿易を行い（いわゆる朝貢貿易）、経済的に豊かになる。 倭国内での敵対国に優位に立つ。 ・魏の軍事顧問・張政を送ってもらい、敵対する狗奴国との和平交渉を依頼した。 ・鉄素材を独占的に入手する？
倭の五王が宋に朝貢	421 ～ 478 年	<ul style="list-style-type: none"> ・中国の先進的な文明を摂取すると共に、中国皇帝の威光を借りることによって当時の倭（ヤマト王権）にまつろわぬ（帰順しない）諸豪族を抑え、国内の支配を安定させる意図があったと推測される。

		<ul style="list-style-type: none"> ・朝鮮半島諸国に対して軍事的支配権を示す高い称号を得ようとしたことがわかる。 ・鉄を独占的に輸入し、諸豪族を支配する。
推古天皇が遣随使を派遣 隋に朝貢使を派遣（3回から5回）	600 ～ 618年	推古朝の時代、倭国が技術や制度を学ぶために隋に朝貢使を派遣した

(3) 空白の4世紀（266～413年）

倭に関する資料が無いのは3世紀末頃から4世紀初の「八王の乱」によって大陸の政情が不安定だったからのようだ。

「八王の乱」とは、中国の王朝晋（西晋）の滅亡のきっかけを作った司馬氏一族の8人の王たちの内乱である。西晋（265～315年）は100年に渡る三国時代に終止符を打って全土を統一したが、その平穩はわずか数十年で崩れ去った。この後、中国は隋が統一するまでのおよそ300年にわたり、再び動乱の時代を迎える事となる。

(4) 朝鮮半島への進出（4世紀～）

414年に建立された高句麗の好太王碑（または広開土王碑）によれば、391年に倭（ヤマト王権）が朝鮮に出兵したとある。



好太王碑



碑文

碑文と解釈

【百殘新羅舊是屬民由來朝貢而倭以未卯年來渡海破百殘連侵新羅以為臣民

・日本の専門家

そもそも新羅・百残（百済の蔑称）は（高句麗の）属民であり、朝貢していた。しかし、倭が辛卯年（391年）に[海]を渡り百残・■■■（「百残を■■■し」と訓む説や、「加羅」（任那）と読む説などもある）・新羅を破り、臣民となしてしまった。

・韓国の歴史学者

新羅・百残（百済）は（高句麗の）属民であり、朝貢していた。しかし、倭が辛卯年（391年）に（高句麗に）来たので（高句麗は）海を渡り（倭を）破った。（海を渡って来た倭を破ったとの説が妥当のようだ）百残はそんな倭と連合して（高句麗の臣民である）新羅に攻め入った。（好太王は）臣民である（百残が）どうしてこんな事をしたのかと思った。】である。

・4世紀には【大和王権は朝鮮半島に進出していく。新羅（しらぎ）当時、朝鮮半島では「高句麗（こうくり）」「百済（くだら）」「新羅（しらぎ）」、三国の勢力争いが激化していた。そんな中、高句麗に侵攻された百済はヤマト王権と同盟を結び、高句麗に対抗した。】

・5世紀に任那日本府が伽耶地域（朝鮮半島中南部）にあったとされる。

【日本の「前方後円墳」と類似した様式の墓が朝鮮半島南部で発掘され、倭系集団の存在が浮上した。2010年には、日韓歴史共同研究委員会が、任那日本府（原表記「在安羅諸倭臣等」とは、5世紀代の倭と半島との関係や地方豪族の独自の通交などにより、伽耶地域、特に古くから倭とつながりの深かった安羅に居住した倭人の一団であり、加耶諸国と共通の利害を有し、ほぼ対等な関係で彼らと接し、主に外交交渉に協同で従事していたとまとめることができた。】

(5) 倭の五王（讚、珍、済、興、武）の朝貢（5世紀初～5世紀末）

5項の「倭の五王と初期天皇の实在性」による。

(6) 「大王」の称号（5世紀後半～）

【豪族の地位は王権への貢献度や関係性によって決定されたのだろう。「王」の呼称は中国大陸に由来すると思われ、日本の「王」の初出は後漢の皇帝（光武帝）が57年、日本列島にあった「奴国」の統治者に「漢委奴国王」と刻んだ金印（漢委奴国王印）を贈ったというものである。



5世紀後半には、王の尊称である「大王」の号が現れる。当初、統一国家の政府を意味する朝廷の成立はなかったと考えられるが、5世紀後半の獲加多支鹵（わかたける）大王（埼玉県・稲荷山古墳出土の鉄剣銘（*4）、また熊本県・江田船山古墳出土鉄刀銘に見られるように、ヤマト王権は九州から関東地方までを勢力下に置いた。このように国内支配が広がりを見せるころ、大王はヤマト政権の王の称号として用いられた。それは複数いた王のなかで最高の権威と権力をもつという意味があり、飛鳥浄御原令（あすかきよみはらりょう）の編纂が始まった680年代まで用いられた。】

*4. 稲荷山古墳出土鉄剣（埼玉県）

・銘文の表

辛亥年七月中記、乎獲居臣、上祖名意富比埜、其児多加利足尼、其児名亘已加利獲居、其児名多加披次獲居、其児名多沙鬼獲居、其児名半亘比

・銘文の裏

其児名加差披余、其児名乎獲居臣、世々為杖刀人首、奉事来至今、獲加多支鹵大王寺在斯鬼宮時、吾左治天下、令作此百練利刀、記吾奉事根原也

・銘文の大意

この剣は辛亥年（471年）に作られた。

この剣を作らせたヲワケの祖先オホヒコからヲワケに至る8代の系譜とヲワケの家が代々杖刀人（じょうとうじん、大刀をもって大王の宮を護る人）の首（かしら）として大王に支えてきた由来を記し、獲加多支鹵大王（わかたけるだいおう）の朝廷が斯鬼宮（しきのみや）にあった時、自分は大王が天下を治めるのを助けたこと、この練りに練ったよく切れる刀を作って、自らが大王に仕えまつる由来を記す、というものである。

「武」が第21代雄略天皇説の根拠

・雄略天皇の在位期間は456～479年

・古事記では「大長谷若建命（おおはつせわかたけのみこと）」

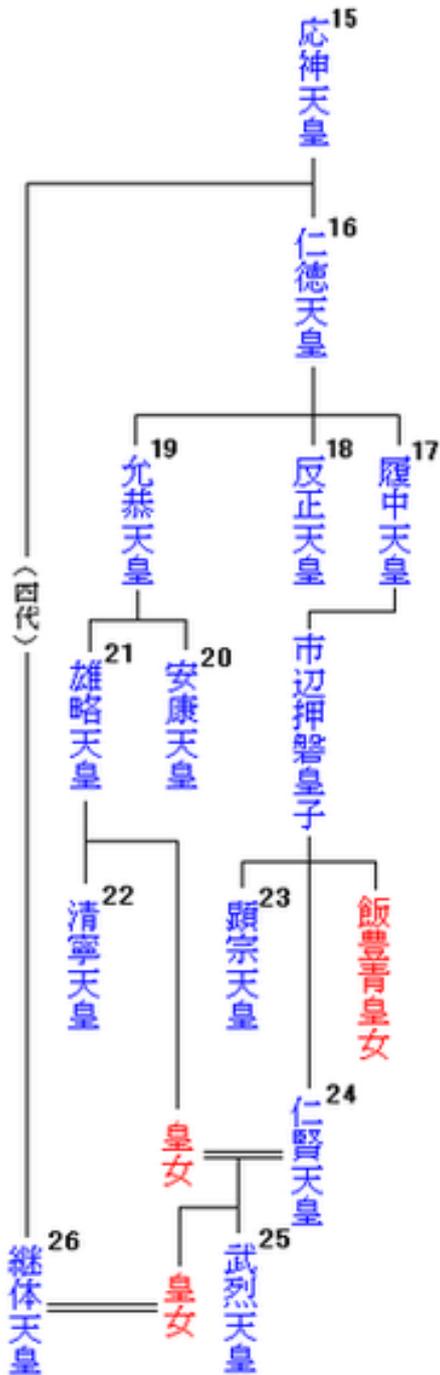
・日本書紀では「大泊瀬幼武天皇（おおはつせわかたけのすめらみこと）」

・埼玉県の稲荷山古墳より出土した鉄剣の銘文にある「獲加多支鹵」（ワク（カク）カタキ（シ）ル（ロ））が『古事記』にある名称「大長谷若建」の中の「若建」（ワカタケルとしている）と『日本書紀』の名称「大泊瀬幼武」の中の「幼武」（これもワカタケルとしている）と類似していることから「考古学で存在が確認された最古の天皇」と言われている。また宋書の倭王「武」の文字が名前の「幼武」に使われている。

・「武」の遣使の時期 478 年が雄略天皇の在位期間 456～479 年内で時期が合致している。

(7) 継体天皇 (507～531 年)

継体天皇は第 15 代・応神天皇の五世孫とされているが、これが事実かどうかは判断がわかれている。



☛ 手白香皇女 (たしろかのみめみこ)

「継体天皇は近江か越前の豪族であり皇位を篡奪した。」としたという説を唱える歴史家もいる。

また、即位後もすぐには大和の地に入らず、北河内や南山城などの地域を転々とし、即位20年目にヤマトに入ったことから、「ヤマトには継体天皇の即位を認めない勢力があつて戦闘状態にあつた、」と考える説もある。継体天皇はその当時認められていた女系の天皇、すなわち近江の息長氏（おきながうじ）は大王家に妃を何度となく入れており、継体天皇も息長氏系統の王位継承資格者であつて、皇位剥奪のような王朝交替はなかつた。」と考える説もある。なお、継体天皇が事実応神天皇の五世孫であつたとしても、これは血縁が非常に薄い（奈良時代には4世孫までが皇族とされていたので、当時でも応神天皇と疎遠であり、仁徳天皇系にもっと近い血縁者がいなかったのかは疑問が残る）ため、王朝交替説とは関わりなく継体天皇をもつて皇統に変更があつたとみなす学者は多い。ただし、継体天皇の即位にあたっては前政権の支配機構をそっくりそのまま受け継いでいること、また血統の点でも**第24代・仁賢天皇（にんけんてんのう）の皇女・手白香皇女（たしらかのひめみこ）を妻として入り婿の形で皇位を継承していること**などから、これを新王朝として区別できるかどうかは疑問とする考え方もある。

(8) 磐井の乱（527～528年）

○日本書紀によると

「新羅が筑紫国造磐井に賄賂を送つて、ヤマト政権に反乱を起こした。磐井は挙兵し、火の国（肥前国・肥後国）と豊の国（豊前国・豊後国）を制圧するとともに、倭国と朝鮮半島とを結ぶ海路を封鎖して朝鮮半島諸国からの朝貢船を誘い込み、近江毛野（おうみのけな）軍の進軍をはばんで交戦し、朝廷軍に敗れた。」とある。

○古事記によると

「この御世に、筑紫君石井（筑紫の君磐井）が天皇の命に従わず、無礼が多くあつた。そこで物部荒甲之大連と大伴金村連の二人を遣して、石井（磐井）を殺した。」とある。

○筑後国風土記によると

「筑紫君磐井が豪強暴虐（勢いがあつて強くて、むごくて人を苦しめる）にして、天皇に従わなかつた。生前のうちに、あらかじめこの墓を造つた。急に官軍が動員され襲撃した時に、勢いを見て勝てないことを悟つて、独りで豊前国上膳県に隠れて、南山の険しい嶺の隅で亡くなつた。ここにおいて官軍は、磐井を見

失った。兵士の怒りは止まず、石人の手を撃ち折り、石馬の頭を打ち落とした。」とある。

○磐井の墓とされている岩戸山古墳の出土品

石人・石馬



阿蘇山の噴火により形成された凝灰岩で作られているもので武装した兵士や馬・盾・鞍（ゆぎ）などのリアルな造形が見事です。



石馬

○朝鮮半島側の史料によると

『三国史記』『三国遺事』といった資料には、磐井の乱の記事は全く存在せず、新羅が磐井に賄賂を送ったとする証拠は見当たらない。」とある。史料から真実は読み取れないが、当時、九州北中部の首長らは『筑紫連合政権』を形成しており、磐井はその盟主だった。反乱ではなく王権同士の争いだったとの説もある。

(9) 古墳時代後期（6世紀）のヤマト王権の仕組み



大和地方の有力な豪族として知られるのは、「葛城（かずらき）氏・大伴（おおとも）氏・蘇我（そが）氏」などで、これらの豪族の集団を「氏（うじ）」と呼ぶ。そして、各豪族の代表者は「氏上（うじのかみ）」として大和王権に仕えた。当時の豪族は、中央・地方に関わらず私有地を持ち、そこを耕作する民を支配していた。

ヤマト王権はこうした豪族たちに対して、王権における職務や家柄に応じた、地位や身分を表す「臣（おみ）・連（むらじ）」などの「姓（かばね）」と呼ばれる称号を与えて組織し、その地位や特権は世襲されていった。

ヤマト王権は中央の豪族を統括するだけでなく、地方の有力な豪族を「国造（くにのみやつこ）」に任じ、姓を与えて組織し、地方に対する支配も強化していった。

(10) 馬・馬具の存在（5世紀中～）

【『魏志倭人伝』によると、邪馬台国をはじめとするその他のクニでも馬は存在していなかったと書かれている。はっきりと馬そのものの遺骸が確認できるのは5世紀の中頃（西暦450年前後）、宮崎県六野原地下式横穴墓群8号墓から出土した馬で、轡（くつわ）を口に装着したままの姿で墓に葬られていた。以降九州では、6世紀の後半までは宮崎県や熊本県を中心に馬を殉葬する例が多く、それ以後は福岡県小郡市周辺で多く見られるようになる。5世紀後半から6世紀後半にかけては、大阪の東大阪地方、生駒山麓や旧河内湖周辺の遺跡から、馬の骨の出土例が31を数える。】

邪馬台国時代に存在していなかった馬が唐突に誕生するはずがないので、大陸から船に乗せて渡らせてきたと考えられる。

現在までの所、古墳から馬の骨が出土するのは宮崎県から青森県まで約150例が確認されているが、馬が全国的に普及するのは6世紀になってからであり、7世紀になっても馬を葬った土抗は発見されている。馬には輸送、通信、農作業などさまざまな用途があるが、5世紀前後、日本列島にこの動物が持ち込まれたのは軍事利用のためだったとされる。

(11) 仏教伝来がもたらした抗争（6世紀中～）

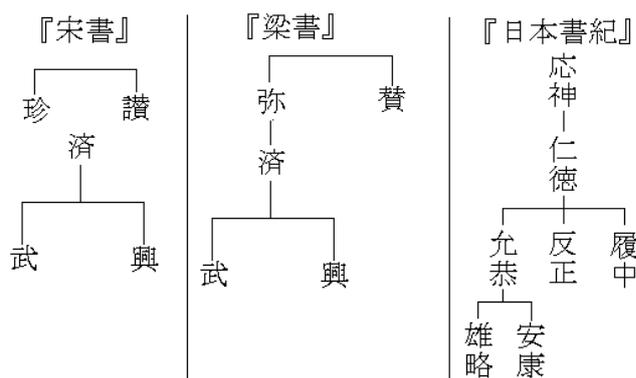
6世紀の半ば、中国、朝鮮半島を経て、仏教が伝えられたが、この仏教をめぐって国内で大きな抗争が起こった。ヤマト王権で大きな勢力を持っていた蘇我（そが）氏と物部（もののべ）氏の抗争である。仏教という新しい宗教を積極的に受け入れようという蘇我氏。それに対して、仏教受け入れに反対する物部氏。この対立は、やがてほかの豪族たちをも巻き込んだ抗争になった。激しい戦いの末、蘇我氏が勝利し、このあと、仏教を信じるのが国の方針となっていく。このことにより政治的権威の象徴が古墳から寺院に変わっていった。

抗争には、まだ10代前半だった厩戸皇子（聖徳太子）も蘇我氏の軍勢に加わっていたとされる。6世紀の終わりごろ、厩戸皇子は、摂政として新しい国のしくみを整えることに取り組み、604年に「十七条の憲法」を定めたとされる。「一に日（いわ）く、和を以（もつ）て貴（とうと）しとなす」で、第一条で示したのは、人々の「和」だった。

5. 倭の五王と初期天皇の实在性（5世紀初～5世紀末）

宋書倭人伝によれば、421年～478年にかけて倭の五王（讚、珍、濟、興、武）が朝貢したとある。古代から江戸時代までアジアの中で中国は絶対的な地位があったので、倭の五王は中国に日本の王と認めてもらうことで、自分の地位を盤石にした。というのが一般的な通説だ。また朝鮮半島に勃興してきた高句麗に対抗するため、倭国の地位および朝鮮半島支配を中国に承認させ、それによって半島における立場を強化しようとしたものと言われている。

倭の五王の血縁関係と天皇



『宋書』によれば、「讚」と「濟」の血縁関係は書かれていないので、血縁関係は無かったのだろう。後に書かれた『梁書』は『宋書』を読んだ上で、書き上げたのだろうが、推測により潤色したと想定される。

日本書紀や古事記には曲筆や潤色もあり、歴代天皇との比定は至難のようだが、478年に朝貢の使者を出した倭国の王・武が第21代・雄略天皇（在位期間456～479年）であるとの説が有力である。（雄略天皇は考古学的に实在が証明され最古の天皇との説がある。）日本書紀によれば、507年に越の国（福井県）より、第26代・継体天皇を迎えたとある。継体天皇の实在は确实と考えられるものの、それ以前の天皇については、雄略天皇を別として、武烈天皇までは实在の可能性が薄いという見解も含めて、初期天皇の实在性については諸説ある。（*5）

*5. 初期天皇の实在性に関する諸説

初代神武天皇から第25代武烈天皇までの实在性については、諸説ある。第二次世界大戦後の考古学及び歴史学においては、初期天皇は典拠（頼りに）で

きる根拠)が神話等であるとみなされ、その実在性は疑問視されている。しかしながら現代でも神武天皇、第10代崇神天皇、第15代応神天皇が特に研究対象として重視されている。

初代神武天皇以降を実在とする説

古代から第二次世界大戦中までは日本では神武天皇のみならず「欠史八代」も含めて実在したと考えられてきた(第2代綏靖天皇から第9代開化天皇までは、『日本書紀』に事績等に関する記述がないため、欠史八代(闕史八代)と呼ばれる)。その後も実在性を唱える者は坂本太郎氏、田中卓氏、鳥越憲三郎氏、林房雄氏、古田武彦氏、森清人氏、安本美典氏などである。

第10代崇神天皇以降を実在とする説

戦後になると神武天皇及び「欠史八代」の実在は疑問視されるようになった。また神武天皇と崇神天皇の尊号が同一(ただし漢字表記は別)であることから、崇神天皇を初代天皇、あるいは神武天皇と同一人物であるとして、崇神天皇を実在可能性がある最初の天皇とする説が一般化した。70年代までは崇神～応神までの実在を否定的にみる説が優勢であったが、1978年に稻荷山鉄剣の銘文が新聞紙上でスクープになると銘文の「意富比埜」が、崇神朝に活躍した大毘古に同定されるとする説が出て、崇神天皇以降の実在性が高まった。

第15代応神天皇以降を実在とする説

津田左右吉によって、4世紀後半から5世紀初めにかけて在位したと考えられる応神天皇が初代天皇とみなされ、それ以前の天皇の実在を否定する学説が提示され、第二次世界大戦後、歴史学の主流となった。これには倭の五王を記紀に伝えられる天皇と同一視する説が有力であり、この場合、中国の史書が該当する天皇の実在を傍証することになる(ただし倭の五王を具体的にどの天皇だと見るかは諸説ある)。なお、倭王武に比定される第21代雄略天皇に関しては稻荷山鉄剣銘文の「獲加多支鹵大王」(ワカタケル)を雄略天皇の名である「大泊瀬幼武」(おおはつせわかたけ)と解し、実在の証とする説がある。これ以前から雄略天皇の実在は有力視されていたが、この発見により考古学的に実在が証明される最古の天皇となった。

第26代継体天皇以降を実在とする説

戦後の歴史学界では、『古事記』や『日本書紀』における6世紀以前の記述は、不正確な伝説であると解されていた。このため、6世紀前半に在位したと考えられる第26代継体天皇の実在は確実と考えられるものの、それ以前の

天皇については、雄略天皇を別として、武烈天皇までは実在の可能性が薄いという見解がある。また継体天皇以前の天皇を実在とみなす学説であっても『日本書紀』の編年を事実とは認めないことがほとんどだが、継体天皇以降は書紀その他の史料に伝えられた在位年数などの数値はかなりの程度史実とみなされている（継体天皇の即位年について書紀を信頼するかは説が分かれる。また継体崩御から第29代欽明天皇の即位までの間の編年は伝承自体に諸説がある他、欽明天皇から第33代推古天皇までは記紀の間に最低1年～数年程度のズレもあるが、継体天皇以降はほぼ史料的价值が認められている）。

日本書紀は歴代天皇1代ごとに書かれているが、2代から9代までの八代はまとめて書かれている。後の世に加筆された疑念も含めて「欠史八代」は曲筆されたものとする説は妥当のようだ。

日本書紀には卑弥呼について触れていないが、卑弥呼＝神功皇后と思わせる書き方をしている。しかし、天皇ではない神功皇后だけが卑弥呼の時期に合わせて不自然に書かれており、それも詳しく記述されている。しかし、卑弥呼は独身だったのに。神功皇后は結婚していたので人物像が異なる。天皇家は卑弥呼とは別系統だが、中国の史料にある女王・卑弥呼は無視できないので、後世の人が同一人物であると憶測するのを期待したのだろうか？

6. 海上航行の手段

5世紀代に築造とされる長原高廻り古墳（ながはらたかまわりこふん、大阪市）から発掘された舟形埴輪



丸木舟と呼ばれる船は、縄文時代から使われていた。弥生時代から古墳時代になると、埴輪のような丸木舟を土台としてその上部に部材を足して大型化を図った「準構造船」が使われたようだ。

後の遣隋使船や遣唐使船も難破している。8世紀に日本に渡ってきた鑑真和尚は6回目の渡航でやっと成功した。埴輪のような船であれば、難破することも多かったはずだ。しかし、リスクは覚悟で、幾多の困難を乗り越えて朝貢することにメリットがあったのだろう。

7. さいごに

この時代は大陸の史料が乏しく、日本書紀の曲筆や潤色も想定されるので、謎の多いヤマト王権となってしまった。卑弥呼、倭の五王、初期天皇の時期は王権が交代した可能性は否定できない。宮内庁管理下の箸墓古墳等の発掘は出来ないの、物質を透過する宇宙線「ミュオン」を利用して敷地外から内部の様子を探る調査とか、新たな方法で調査出来れば、新たな展開が期待できそうだ。

参考資料

- ・NHK、E T V特集；誕生ヤマト王権
- ・B S-TBS 関口宏の古代史；ヤマト王権
- ・ウィキペディア
- ・他

以上